トビ（竜蛇）神と南方文化

富来隆

一、内山のトビ・トビノヲ

別府湾の奥に、高く聳え立つ鶴見岳の山群がある。

その鶴見岳の北に連なる内山とは、一体何であるのだろうか。

三重町に内山の観音があることはよく知られているけれども、何に対しての内山なのか。こういう説明はあまり聞いたことがない。

だが、畏くも、宮中の大内山をはじめ、伊勢宮の傍らを流れる宮川の源流が大内山川となり、大内山がある。

宇佐宮においても、傍らを流れる寄藻川が、西に小山田社をめぐって東し、御許山・大蔵山に囲まれた源流を、内山（大内山）とよばれている。

それらから考えると、鶴見岳の神を祀る火男火売神社の傍らを流れる萩川（春木川）の源流を内山とよんだのだとは、容易にうなづけよう。

そして、この内山とその東の大平山との間にトビの地名があり、さらにトビノヲの湯の伝承がある。

トビの湯浴から発見されたからトビノヲの湯というが、あるいはトビの地の湯だからトビノヲの湯となったのかは知らぬが――トビの湯でなくて、トビノヲと云うところがミソである――。

もし、トビが鳥のトビ（鳶・鵄）のことを云うのだとすると、すぐ思い出すことがある。それは神武天皇の東征にかかる「金の鵄」のことである。日向からセト内海を東して大和に向った天皇が、登美彦（長髄彦）の軍に阻まれて、「日ノ御子である天皇が、東に向って攻めるからいけないのだ」と、それから熊野に南を回って北上

した話。そこで登美彦の側から（そのトーテムとも云うべき）金のトビが飛んできて、天皇の弓の弭に止まったので、登美彦は降参した話である。

いま地名は鵄山で、富ノ雄町にある（川をしゃれて富ノ小川とよんでいる）。赤マムシの巣窟である。

トビ・トビノヲ（トミノヲ）の地名は、各地にある。近くは祖母山の東南、古祖母岳の東を豊後から日向に越える尾平峠の南側、高千穂町に入るとすぐに「登尾」の地があり、さらに下ると西に「富之尾」の地がある。豊後の側では尾平のすぐ北の上畑に健男社があり、ずっと下って冬原の地に嫗社があり、その西に「飛ノ尾」の地名がある。高千穂町では富之尾の西に土呂久（鉱山）があり、その西に竜泉寺がある。これに対し緒方町では嫗社の傍らに竜千寺があり、その北（飛ノ尾の東）に加賀知がある。加賀は朝鮮語 Kwang の宛字であるから、ここも鉱地であることを示している。上畑の健男社を訪れたとき、石の地蔵さまがあった。うしろにまわってみたら、陽物の形（福神）である。やっぱり鉱山だ。

尾平自身が鉱山であるが、県境をはさんで、南北の、何とよく似ていることよ、と云いたくなる。

別府のトビはツチノコ騒動があり、ここにはタタラがある。鍛冶の地である。

さらに大平山は雨乞いの山であるが、これに関連して大平山の北側に「祖母の風穴」というのがある、と近ごろ入江氏が聞いて教えて下さった。何となく似かよっているようで、これは研究に値すると思われる。

トビ（トメ）が宇佐と関係深いことは云うまでもないが、あとまわしにするとして、トミノヲについての面白い伝説を一つ紹介するとしよう。

大分・宮崎などの近くだけでなく、西日本各地にみられるのであるが、やはり有名な故事と引きくらべてみることが理解をすすめる早道であろう。

はや三十年以上も昔の話になるが、京都から琵琶湖を西からぐるっと回って、東岸の犬上郡富之尾の地を訪れた。東は三国峠である。富之尾の大滝山に犬神明神があり、滝宮とい云われている。

ふつうのお宮とちがって深々とした森におおわれていてうす暗く、夏も涼しく、あまり気持ちのよい境内では

なかった。その奥に渓流が岩を噛んで流れていたが、この巨岩が石灰岩の岩床で、まるで巨獣の白骨でも見るようで、少々うす気味わるかった想い出がある。

このお宮には、つぎのような伝説があって名高い。

「昔、ある猟師がいた。小白丸という犬を愛し、いつも連れ歩いていたが、ある時、山に入る折節、何となく物すごい畏怖の心おこって、弓に矢をとりそろえ、小白丸を側に伴い、大木の朽ちたるに後盾をとって、夜の明けるのを待っていた。深更に及んで、彼の犬しきりに飛上り、飛かかって、吠かかる。猟師がいくら叱っても吠えいがむ。ついに猟師が怒って剣をぬき、小白丸の首を打落してしまった。ところが、その首が飛上り、朽木より大蛇の下りて口をひらき、猟師を呑まんとしかかる吭にしかと噛みついた。これによって猟師、大いに感じ入り、悔いたるも詮なく、神祠を営祝って、犬の神と崇めた。いまの犬神明神がこれである。」(『三国遺事』)

この話は、和泉国の犬鳴滝の故諺とよく似ている、といわれる。それどころか、これとそっくりの話が、じつは豊後にもあるのだ。あばれん坊で有名だった源ノ為朝が、父から放逐されて西下し、九州は豊後の大野郡梨原村に着いたが、そこから二豊肥筑の間を往還した。その手始めに速見郡竈門(かまど)荘の葉室山に出張し、郡領の大神(おおが)ノ惟敏父子と戦った、と見えている(『豊陽古事談』)。

大神氏のことはまた後に記すとして、源ノ為朝は狼を手なづけて犬のように使い、直入郡久住町に、右とそっくりの大蛇(おろち)退治の話がのこっている(赤岩の地名)。

それだけではない。祖母山の大蛇神の子孫たる緒方ノ惟栄にも、これと似た話があるのには驚きである。

八岐ノ大蛇を退治した素戔嗚尊(すさのお)が大蛇神だというのと同巧異曲であろうか。

さらには稲葉の白兎を助けたことで子供たちに人気のある大国主神が大物ノ主命であり、三輪の大神となって恐ろしい大蛇神だ。となると、日本の神話・歴史はいったいどうなっているのだろうか。

三輪の神で想い出した。これも古いことではあるが、奈良の天理市の岩室に金関丈夫(たけお)先生のお宅を訪ねたとき

のことである。歩いていて途中で大分の貸切バス二台に行きちがったのは、懐かしくもあった。

そこで先生の奥様から伺った話が忘れられないのは、「この地方で三輪の町に行くことを、ミワに行くとは云わないで、トビに行く、と云うんですよ、そしてヘビと云わずミイさまと云います、」とのこと。

三輪駅（町）の東に三輪山がある。

三輪駅の南に桜井の駅（町）があり、その東から南にかけて外山（トビ）の小山がある。そこに宗像神社があり、また等弥神社も作られている。トビとは宗像神の化身である。「大神（オオミワ）神社の町をトビという」とはまことに予想外であり、どう解したら良いのか、これは私にとっての大きな課題となった。

一寸それるが似たようなことがある。あの三井寺は、ミイ（巳）さまで、三輪の神と同じく蛇神である。その三井寺は、長等山（ナガラ）にあり、長等神社もそこにあるのだ。ナガラも蛇神である。

トビ（トビノヲ）、ミワ（大神）・ミイ（巳）そして、ナガラ（長良・那賀ほか）。沢山の蛇神がまるで同居しているようである。

ナガラ蛇で有名な話は、わが佐伯市の長良神社の縁起が面白い。それはこうである。

「むかし、土佐から船にのってやって来た一人の坊さまが、スカの所で上ると言い出した。港はもう少し先だと船頭がとめるのも聞かずに、海にとびこんで、白蛇となって泳いで陸に上った。（いま蛇崎という。弘法大師をまつる聖神社がある）。蛇の姿を見失った汐月（地名ツキは村のこと、塩村または塩田村のこと）の森の中で、翌年、その蛇のヌケガラがとぐろを巻いているのを見つけたが、その上に阿弥陀如来像があった。近くに尾のヌケガラもあったので、これらをまとめて神に祀って、尾長良権現といった。」

この社をいま、長良神社とする。

内山にもどろう。トビの奥にツチノコ騒動があった。神武天皇の東征に熊野から北上するとき、高倉下（クラジ、のち高倉とだけでもタカクラジとよんだ）、そのあと兄クラジ・弟クラジを征している。宇佐では小倉山の

南に大蔵山あり、南の由布院に倉木山あり、ミヅチ（水虵）神社がある。倉木山は大分由須原八幡の杣山であるが、倉木は Kurangi の音写でクラジ＝クラギ＝蛇である。南してさらに倉木山あり、祖母山にたっする。

かくて宇佐と祖母とは、蛇神を通して南北に、直接にむすびつく。鍛冶では倉下（クラゲ）神と言っている。

人物としても、日本のような伝統的（歴史的）な社会は、それを変化させる原動力として偉人を必要とする。マックス・ウェーバーの云うカリスマの出現である。

宇佐では大宮司の始祖、大神（オウガ）ノ比義（ヒキ）こそは、神仙カリスマとよぶにふさわしい。

祖母山麓では蛇神婚としての大神ノ惟基をかついでの超人カリスマたる緒方ノ惟栄がふさわしい（彼には尻に蛇のウロコの型があるのだ――）。

日本では、大蛇神は、海や山の神とばかり思っていたのに、さきに見たように寺佛の方も出てきている。

琵琶湖南の長等山・長等神社（ナガラ）は、〝ヒサシを貸して母屋をとられた〟ように、三井寺（ミイ）の方ばかり有名になった。

また大分の佐伯市では、お坊さまが白蛇となり、そのヌケガラの上に阿弥陀仏の像があった、と伝える。

そう云えば、大蛇の本家本元は、インドから東南アジアにかけてのものが、世界中にひろがったのだった。

これは、大変なことになった。いくら本を読んでも追いつかないが、幸い展覧会があるので、それを見よう。

とは云え、やはり、この論文では、内山のトビ・トビノヲと祖母の風穴とから考えをすすめるのだから、順序としては、まずそちらから始めるとしよう。

二、大神（おおが）氏の活動

宇佐宮系と、祖母岳系と、三輪高宮系の大神（おおみわ）氏。

くわしくは中野幡能（なかのはたよし）氏や、渡辺澄夫（わたなべすみお）氏、また西川功（にしかわいさお）氏などの著にゆずり、私見を分りやすく述べたい。

宇佐大神氏の始祖とよばれる大神ノ比義は、オウガのヒキである。ヒギでもなく、コレヨシでもない。

どこから来た人物か分らず、三百歳とも五百歳とも云

われる。文字どうりの神仙カリスマ（注、カリスマとは超人的英雄の意）とよばれる始祖伝承である。

その点から、この名前は、むしろ外来系として考える方が妥当である。大神（オウガ）とは Wang（王）の音写であり、天皇では別・和気（ワケ）などの文字が使われている。

景行天皇の名を『書紀』では大足彦忍代別天皇（オオタラシヒコヲシロワケノスメラミコト）と記し、『古事記』では同じ名を大帯日子淤斯呂和気天皇とある。

それに対し、比義（ヒキ）とは Pit-Kil（光の道）の音写であり、日置・比企などと同じと云えよう。

日置について、先人の説を要約すると、

太陽神をまつり、また暦法・卜占と関係する。

（柳田国男氏、折口信夫氏）

神火を常置し、管理する（火継ぎの神事）

（中山太郎氏）

これによれば、大神ノ比義とは、日置の長（王）として、典型的な神仙・始祖の伝承と云える。

これが三輪の高宮系図にとりこまれた（※取り込まれたのである）ことは、中野氏の説明で十分であろう。渡辺氏もそれを受け継いでいる。

伊勢宮とならんで、「二所宗廟」とよばれた宇佐宮だから、その祝である大神ノ比義を、「大神」の文字から自分の系図に取り込んだのである。

『大神（オウミワ）姓の人々』の著者武島惟茂氏でさえ、比義の兄とされる特牛（コットイ）を、比義をとりこむために作った人物ではないかと疑っている。

特牛（コットイ）を、御厩の皇子、蘇我の馬子、また入鹿の名にあやかり、対抗して、ここに挿入した作られた人物としている。そんな感じが強い。

（いまも、大分では、牡牛をコットイ、牝牛をウナメ、仔牛をベベッコとよんでいる）。特牛とは、傳写している間に牡牛を写し誤ったのではないかとさえ疑われるではないか。

後代の、大神ノ良臣も、祖母岳の大蛇神婚譚で知られる祖母系の大神ノ惟基にむすびつけるために、オウミワをオウガとしたのではないだろうか（後述する）。

それよりも惟基の始祖伝承の成立を、既成的な事実と

してうけ入れるのでなく、もう一度、初心にもどって、批判的に考えてみたい。

源平の合戦に、源ノ頼朝から「豊後の船だにあらば、安事なり」（『吾妻鏡』）と云わしめ、直ちに兵船八十二艘をもって援軍したという臼杵・緒方氏である。

ことに緒方ノ惟栄（これし）は、また『平家物語』や『源平盛衰記』に、早くも大々的に報ぜられている精強なカリスマである。惟基は、それより五代前の始祖である。母を、

(1)『平家』には「豊後の片山里の女、一人娘」、

(2)『盛衰記』には「日向国塩田の大太夫の娘、花御本（はなのおもと）」

(3)またその長門本として「豊後国知田村の赤雁（あかがり）太夫の娘で、柏原御許」（赤雁とは赤銅 Kuri 鍛冶屋）

(4)また南都本として「豊後国伊智田村ノ大太夫……」とある。

中野幡能氏の云うように宇佐宮の神領をみると、この近くは速見郡や大野郡緒方庄、また日向国臼杵郡などがある。宇佐宮大宮司家から外に出た大神（おおが）氏であり、その庶流たちは当然、右の地を中心にして県南半に拡がったことであろう。だから緒方ノ惟栄もその始祖惟基も、同じく大神（おおが）氏姓を名乗っているのである。高千穂系も同じである。

ところが惟基の父祖の伝承は、右にとどまらない。つぎつぎと多くなり、まるで手品のようである。

(5)さきの三輪高宮系のなかの大神ノ朝臣良臣――これがなぜオウミワでなくて、オウガになるのか（おそらくは大神ノ比義を先例としたのであろうか？）

この良臣の子の庶幾（これちか）の女が、惟基の母、とする。

まだ他にもある。（『高千穂太平記』に詳しい）

(6)一条院の御代、悪事によって配流された准大臣の藤原伊周（これちか）の女とする説。

(7)さらには、藤原ノ冬嗣の子長良（琵琶大臣（おとど））の女。

(8)さらに、藤原ノ仲平の娘、とする説もある。

まだ他にもあるかも知れないが、神話・古代ならいざ知らず、レッキとした歴史時代である。

大神ノ惟基が作られたカリスマにしろ、またそれに乗っかる父祖がいろいろ出る。始祖伝承だからふさわしいと

云うかも知れないが、カリスマならばこうはいかない。とにかく手品としかいいようがないし、緒方ノ惟栄こそが、本当の生けるカリスマだからこそ、こういう事象が生まれたのだと解するよりない。

一転して大神ノ惟基の子供となると、これはまた、まことに整然としてくる。五人説もあり、九人説もあるが、いま『豊陽古事談』その他によってみる（九人説）

(1)長男　高千穂、（三田井太郎政次）
(2)次男　阿南次郎惟季
(3)三男　野尻三郎惟則（以下大神姓大野系図）
(4)四男　直入四郎惟顕
(5)五男　城原五郎惟清
(6)六男　朽網六郎惟道
(7)七男　稙田七郎秀定（または秀平、また惟平）
(8)八男　大野八郎政基（また榮基）
(9)九男　臼杵九郎惟盛

（三、四、五、六が抜けて、五人の系図もあるが、（三男）七郎、（四男）八郎、（五男）九郎、となっている）

それと共に、緒方ノ惟栄の兄弟だけがこれに似ている。『盛衰記』では兄弟三人とし、「次郎ハ死ス、太郎名生（おそらく丹生の誤りか）――三郎尾形ト云」とあるが、諸系図のなかでは、四人あるいは五人となっており、ちがいもあるが、順序は正しくなっている。

（武島氏著より）

臼杵
- 惟長（臼杵太郎）、
- 惟隆（臼杵次郎）
- 惟栄（緒方三郎）
- 惟憲（佐賀四郎）
- 惟与（加来五郎）

（次郎は欠になっている）

（渡辺氏著より）

- 惟隆（臼杵大夫）
- 惟栄（緒方三郎）
- 惟憲（佐賀四郎）
- 女

いずれにしても太郎・次郎・三郎というふうに順序よく並んでおり、始祖の惟基の子が順序よく太郎→九郎に並ぶのと同類である。その点、此所だけが手際よく作られた、ということが一目ではっきりする。

太郎、次郎、三郎のように順序よく並ぶのは、同じ一族のなかでも、他にはみられない。当時として、これは

普通には名付け親による順の呼び名が多かった。
あの仇討ちで有名な曽我兄弟が、兄は十郎、弟は五郎ということ、これだけでもう十分だろう。
だからあまり順序よいのは作りモノだ、ということを示している証拠なのである。
答えは作図だということである。緒方ノ惟栄が〝生けるカリスマ〟だと証明しているわけである。
カリスマの点を云うと、抜かせないことがある。
惟栄と同じく、源平の合戦に活躍した伊豫水軍の雄、河野ノ通清のことである。(『吾妻鏡』治承五年条)
この通清の家乗『豫章記』にはつぎのようにある。
「河野通清の両親には永らく子供がなかった。十余年の結婚生活にも子供がなかった。そこで、子宝を授かりたいと念じて渡島し、大三島明神の前に参篭。かくして、第六日目の夜半に、〝長さ十六丈余りの大蛇、御枕下に寄り伏すと夢の中に思し召して、懐妊あり〟こうして生まれたのが通清であった。」
だから通清は、まさしく大三島明神の実子、(竜蛇神の申し子)なのである。
緒方ノ惟栄とちがって、河野ノ通清は本人自身が蛇神の子なのである。だから額と両脇に鱗があった、と云われている。この点、惟栄と同じである。
ところが惟栄にも、似た話がある。
彼が罪を得て、上州(群馬)の沼田に流されたとき、「三宝山の大蛇が通ってきて、子供をのこした。その子孫が沼田氏である」という。沼田氏は現存している。
はてさて、どうしましょう。カリスマの話。
大陸では、「満月の晩に、窓から蒼い狼が入ってきて生まれた子がジンギスハン(成吉思汗)」といわれる。
蒼い狼の実子なのである。だから軍事的な超英雄となったのである(カリスマの誕生)。

では、何故に惟栄が大神の始祖にならなかったのか。それは、祖母山をとりまく高千穂氏から豊後南半(大野川・大分川岸、豊後水道域)の大神氏諸流を一つのモノとして系図的にまとめたかったからである。
三輪高宮氏のやった「取り込み」を緒方惟栄が「三輪山神話を、取り込んで」一族化したのである。歴史時代

だというのにである。だから河野とは異なる。

話は、通ってきた若君に針の糸をつないだ。行く先まで、何処までも何処までも糸は延びる。無限に糸は延びる。宇田枝の洞穴から直線でも五里、日向延岡の海岸からなら二十里にもなる。まったくすごい糸ではある。

穴森社　　竹田市大字神原

しかもこの大神ノ惟基に「蛇ノ鱗」の型はなくて、五代の孫の惟栄に「鱗の型」がある。紋所も三鱗である。

借りものの蛇神婚にしても、よくもまあ、やった

左に祖母岳の大蛇神婚譚（平家物語）を写してみる。

「彼の維義（惟栄）は、怖しき者の末なりけり　譬へば豊後国の片山里に昔女有けり　或人の一人娘　夫も無りけるが許へ母にも知せず　男夜な夜な通ふ程に　年月も重なる程に　身も只ならず成ぬ　母是を怪しむで「汝が許へ通ふ者は何者ぞ」と問へば　「来るをば見れども帰るをば知らず」とぞいひける　「さらば男の帰らん時験しを附て行む方を繋いでみよ」とぞ教へければ　娘母の教に従て　朝帰りする男の水色の狩衣を著たりけるに狩衣のくびがみに針を刺し　賤の小手巻といふ物を着けて　歴て行方を繋いで行けば　豊後国に取ても日向境嫗嶽と云う嵩のすそ　大なる岩屋の中へぞ繋ぎ入たる女岩屋の口にたゝずんで聞けば　大なる声してぞによび

ける　「わらはこそ是まで尋参たれ　見参せむ」と云いければ　「我は是人の姿にはあらず　汝我姿を見ては肝魂も身に副まじき也　とうとう帰れ　汝が孕める子は男子なるべし　弓矢打物取て　九州二島にならぶ者も有るまじきぞ」といひける　女重て申けるは「縦如何なる姿にても有れ　日ごろの好(よしみ)などか忘るべき　互に姿をも見もし見えむ」といはれて　「さらば」とて、岩屋の中より臥長は五六尺　跡枕べは十四五丈も有らんと覚る大蛇にて　動揺してこそ這出たれ　狩衣のくびがみに刺すと思つる針　即大蛇の喉にこそ差いたりけれ　女是を見て肝魂も身にそはず　引具したる所従十余倒れふためき喚叫んで逃去ぬ　女帰て程なく産をしたりければ　男にてぞ有ける　母方の祖父大太夫生立て見むとて生立たれば未十歳にも満たざるに　背大に顔長く長高かりけり　七歳にて元服せさせ　母方の祖父を大太夫という間　是をば大太とこそ附たりけれ　夏も冬も手足に大きなる胝隙(あかがり)なくわれければ胝大太とこそいはれけれ　件の大蛇は日向国に崇められ給へる高知尾の明神の神体是也」

祖母・高千穂というが、嫗嶽明神また高知尾明神の化身を「取り込んで」緒方ノ惟栄を中心とする大神氏諸流たちを一族として、まとめたのである。

まことにすごい「生けるカリスマ」ではある。

ところで大友の末代、佐伯ノ惟治がだまし討ちにあって戦死したが、その霊が、佐伯から県境をこえて日向にまで、富之尾社（また飛ノ尾社）として祀られ、十八社にも及んでいる。ここにも大蛇神としてトビ・トビノヲが出てくるのである。

別府・内山のトビ・トビノヲは祖母系の大蛇神であり「祖母の風穴」もタタラとむすびつく鍛冶の神としてのものであった。風神がのち、雨乞の神となったのだ。

宇佐宮も『託宣集』に、「鍛冶の翁として現われ、ついで八頭の怪物（霊蛇）となり」、さらに「鷹となり、鳩になった（化鳥）」とされている。

熊野神社も、『神道集』（東洋文庫）に、「熊野権現は、鋳物(いもじ)師明神とよばれる」とあって、同じく鍛冶の神なのである。

のち、時代の変化で、みな農業の神となったのだ。

一つだけ、加えておく。緒方ノ惟栄を中心としての、豊後から日向にかけての大神氏が、やはり惟栄の名によって代表されることになった。左のようにある。

『豊日志』（上）には、大友二十二代のこととして、いろいろ記されているが、その中に、一、同紋家の事、一、一族六十二家の事、一、緒方一族三十七家の事、一、諸氏百五十家の事、とある。

大神氏一族は、緒方一族として示されている。宇佐の東（いま豊後高田市）の都甲氏も、その東の真玉氏も、これに含まれている。日向のほうは含まれてない。

西川氏の『高千穂太平記』には日向がふくまれ、全体にも多くなって、緒方一族五十八家、と記されている。緒方ノ惟栄の精強ぶりが、後代まで浸透している。

三、竜蛇神の変化

――インド・中国・日本――

世界史的に、蛇は霊能神であるが、何といっても、インド・インドシナが本場である。

そのことは、これから後にみることにして、まずは、大神氏の活躍した地域でさがしてみよう。

宇佐の大神氏の地方への進出、まず速見郡領として活動した系図は、中野氏・渡辺氏も記しているが、具体例として考察すると、『豊陽古事談』にある。

「康治元年壬戌（近衛一一四二）、大神朝臣惟敏、豊後介と為り速見郡朝見郷別府に居る。　惟敏は田麻呂之裔也。　初め豊後員外掾として大神郷に移り、朝見村に居す。…」

「仁平二年壬申（近衛一一五二）十二月大神朝臣維繁、豊後介と為り、初め山津に居る。　大分郡高田郷に在り。　後、府中に移る。　惟敏の子也。　後ち別府に帰る。…」

「源ノ公子為朝、少にして頗る武力あり。　豪気、人に過ぐ。　父為義、その朝憲を犯すを恐れ、仁平二年にこれを放ち海西に下る。　まず豊の大野郡梨原村に到

る…　速見郡竈田荘（竈門の誤り）葉室山に出張して、郡領大神惟敏父子と戦ふ……（二豊の間を荒らしまわり九州に威を振う）……」

右のような記事からみて、速見郡山香町の小武寺（ヲタケ、武・岳は竜蛇神 Tak の音写）には、世にも珍しい倶利伽良像がある。おそらく大神氏に関係しよう。

明王剣（不動明王の剣）を立てて、呑みこもうとしている。高さ一八四糎の像である。珍しい像である。

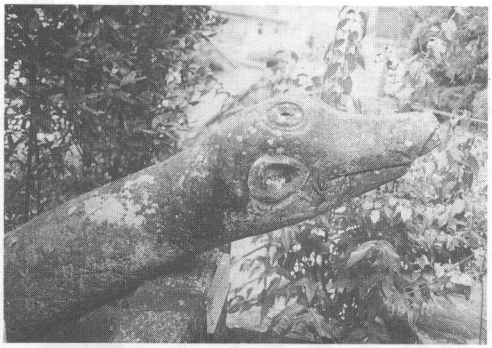
南の大分川口は、滝尾村の下郡であるが、これは祖母岳の健男霜凝彦（タケヲ・シモコリヒコ）が地名化し、二つに分れたもの。下郡に神社がある。下郡と書かれても郡衙ではない。さきの大神惟繁に出ていたように高田の山津が郡衙である。

そこから南に川上に、稙田（わさだ、此所にも大神氏が居た）の高瀬に、石仏がある。

正面の大日如来の、向って左側に深沙大将という珍らしい仏がいる。元は毘沙門さまであり、これが深沙神になった。ふつうは沙悟浄と云われて、三蔵法師が南行してインドに求法したとき、孫悟空らと一緒に供をしたとされる。首にドクロをかけ、手と足とに蛇神がいる。

これは中国化した仏である。のちにはお伽話になってしまったが、とに角、このような仏がここに祀られるのも、大神一族（ヘビ神族）だからこそ、と考えれば、納得ゆくことである。

つぎに肝心の緒方町にみよう。



昔。私がたずねたのは三ケ寺であるが、他にもまだ在ることだろう。

一は、緒方駅のすぐ近く井上にある大福寺である。石段を上りやっと終りという手前、右側に、下から大きな大蛇の首がつき出ている（石製、首だけで三～四米）。頭の上に「王」字がある。正面がお寺の本堂である。大蛇（竜王）そのものが存在する。こんな寺は始めてで、全くビックリした。ヘビ神族の土地ならではのお寺である。

ずっと以前、河室寿長さんに案内されて冬原の嫗社をたずねた時、彫刻された大福寺ソックリの竜神の頭部があった。許可を得て写真をとらせて頂いたが、フイルムがそこだけ真白だったのにビックリしたり、ガックリしたのが、昨日のことのように想い出される。

竜神は想像上のもの、大蛇は実在のものとは分かっていても、やはり神体となると緊張する。本や写真で見るときは、じっくり見れるのだが――。林巳奈夫氏の、『竜の話』（中公新書　一九九三）では、もっぱら中国大陸の竜を主とされていた。それが、つい最近の丸山、竹原氏の『世界の龍の話』（三弥井書店　平成一〇）では、日本・韓国・中国から西欧の各国、さらに南米にまで及んでの、お伽話にちかい物語集となって、こんなにも世界は変わっているのかと驚いた――。（これは皆さんに読んで頂こう）

不犠と女媧

中国大陸では、やはり伏犠氏と女媧の物語であろう。大洪水に生き残った兄妹であり、それが夫婦となって、人類の祖先となった、とされている。

人間の頭をもった二匹の竜とされているが、画をみると人面蛇身にも思われる。下の人間は黄土から作られたもので、上の澄んだきれいな土からは上流貴族が生れ、下の泥んこの土からは下層の庶民が生まれたとされている（貝塚茂樹『神々の誕生　中国史一』筑摩書房）。

もっと身近なところに竜神があり、日本にも移入されているのは、王城・帝都を守護する神々である。

日本では、高松塚古墳の壁画として知られている。

帝都の東西・南北に四神が居る。それぞれ青竜・白虎と、朱雀・玄武として象られ、地形的には東・西が河川・道路で、南・北が低湿地・山丘として考えられているが、また「天子、南面す」の思想から、北が正面ということである。

地理的には奈良や京の都から、諸国の国府に広がり、大分の古国府などをみても、肯づける。

ただ、少々おそれ多いと思われるのは、国技と称する大相撲の土俵上、かつて屋根を支えた柱の色が、今は垂れ幕の房の色と変ったが、四方の房が、東・西・南・北を青房・白房・赤房・黒房でかざられ、北を正面としている。その上、女性は神聖な土俵にのせないなどと、まったく時代おくれの思想を誇っている。

長谷川明氏『相撲の誕生』（新潮選書）によると、

神話としての「角力」から、いまの「相撲」が始めて登場するのは、雄略天皇のときとされている。それも妗女（女官）によるのである。

『日本書紀』雄略天皇十三年（四六八）にみる。（現在ふうに書きなおすと右のようになる。）

「　秋の九月に、大工の葦那部真根が石を台にして手斧をで木を切っていた。終日やっていたが、手斧が石に当たって刃を傷めるということは一度もなかった。そこに現われた天皇は、不思議に思って問いかけた。「いつも石に誤って当てることはないのか」。真根が答えて言った。「けっしてありません」。

すると天皇は　宮中に仕える妗女たちを呼び、衣服

を脱がすと、フンドシを着けさせ、人の見ているところで相撲を取らせた。真根はしばしば手を休めて、仰ぎ見てから木を削ったが、不覚にも、手もとが狂って斧が石に当たり刃を傷つけてしまった。そこで天皇は真根を責めて言った。「どこのどいつだ。朕を恐れずに、つつしみ心もなく、いいかげんなことを軽々しく答えた奴は」。そして、刑吏の物部の者に引き渡して、野原で殺すように命じた。」あとで宥されたが。

女相撲が、神聖な宮中での、日本相撲の始まりなのである。のちに「豊作祈願」（女性の生む力が、神様に通ずるもの）となった、とされる。

相撲とならんで同じく「国技」とされた柔道が、今では世界に開放され、かつ男性とならんで女性の選手権が行なわれているのと比べると、全く別の次元である。

それだけではない。

どんなスポーツも、一シーズンの全取組の全日程が発表されるのに対して、相撲だけは明日の取組みだけしか発表しない。これが神聖なのか？　かくされた裏があるからである。もっと公明正大に、国技として堂々と、シーズンわずか十五日間の全取組表を発表してはどうか。

元にもどして、高松塚古墳の壁画（東西南北）を考えてみる。

この壁画、東の竜にはツノがあり、四本の足がある。もちろん尻尾もある。それに対し、北の玄武のほうが、亀と蛇が一つになった神であることにおどろかされる。

今までは何とも思わなかったが、この文を作っていて

上　玄武
下　青竜

ハッと思いついたことがある。

それは、北（正面）の玄武が、想像上の動物であっても、一つひとつの亀と蛇は実在するものであることだ。

わが国の前方後円墳が、ふつう亀塚とか亀山とよばれること。そしてその周囲には水湟（ホリ）が一重また二重にめぐらされていること。これは墳丘の守護の役目もするだろうが、信仰的に考えると、亀に対する水虵（ミズチ、蛇）の意味をもち、二つ併せて玄武と考えられたのではないだろうか。こう考えると、よくスジ道が立つ。

ナーガ神の上に憩う最高神　ヴィシヌ神
（笹間良彦「蛇物語」）

信仰的に霊蛇が古墳の主を譲っているとすれば、それはそのまま南方での、ブッダ（仏陀）を後から守護しているとされる七頭のナーガ神（蛇神　図参照）に通ずるものがある。

仏教としては、中国を経て日本に来た仏像は、光背となって、ナーガの姿を消したが、南ではナーガ神そのものなのである。

四　むすび　竜蛇神とカリスマ

大学生のときからだから、もう六十年以上になる。日本史を専攻だったが、マックス・ウェーバーに心酔して、アジアの伝統的社会の革新がカリスマによることを、いやというほど肝に銘じてきた。だから、今だに、竜蛇神とカリスマとから離れられない。

卑弥呼のよび名も、ヒミコ（日御子）でもなく、ヒメコ（姫子）でもなく、正しくはペミコ（蛇使いのシャーマン）だっただろう。

それにしても、アンコール・ワット千年史展の目録で、「ブッダ」（仏陀）の姿の、下の敷物がトグロを巻いたナー

アンコール・ワットの仏陀（目録より）
三重に巻いたトグロの上、仏陀が七頭のナーガ神に守られている。（東京美術館展目録）

ガ（蛇神）で、うしろの光背に似たのが七頭のナーガ神がブッダを守っている姿だというのに驚いた。

実物を展覧した人たちは、さぞビックリしたことではあろう。蛇が霊能神であることを実際に拝んだのだ。

抽象化したとは云え、日本の神話や、海・山の神々が竜蛇神で充ち満ちているのは、やはり南方文化の影響であろう。

一つ忘れてならないものにシメ縄がある。

神社の鳥居から本殿に、それぞれのお宮で、細く長いもの、太いもの、波うっているもの等、いろいろある。みな、蛇の形をあらわす。

お正月の各家にかざるシメ縄も地方によって異なる。

大分の方は真中が太く（子が居る）、両端が上がっているわかりやすい形。両端を上で丸くしばっている形や、逆に両端を下でしばっている形もある。大中小と三重にトグロ巻きした地方（広島・京都）のもある。

豊前では、赤い嘴に羽根を大きくひろげた鶴、その下に一本の綱（ヘビ）がいるシメ縄である。それに尾平のアワボダラをふくめて、集めた分は、宇佐の歴史博物館ができるので寄贈した。

それにしても、一つ、知っておくべきことがある。

八幡神の顕現（その始まり）を対馬に求める説明、これは永留久恵氏の『古代史の鍵・対馬』に見る。

そして対馬の最北端に「豊村」があり、そこに祖母神タケヲシモコリ彦の神社があることを、鈴木棠三氏の、『対馬の神道――対州神社誌――』が教えてくれる。

祖母山が、一名添利山（ソウリヤマ）といわれて、背振山（セブリヤマ）と同じく、朝鮮半島の「所夫里」（ソフリ・ソウル）の音写だとういことを知れば、また新しい知見がひらける。

一つの地名、一つの伝承も、そこだけのものではなくて、日本からアジア大陸にまで通じていることを知る。

現在だけでなく、太古の昔から、人間は世界人であったのだ。一人よがりの思い上りからおりて、世界を見まわすことが必要だ、と、しみじみ感じる。　以上